

量的なもの支配^①
ラウル・ヴァーナー／江口幹訳

I

商品交換のシステムが、人間の、彼自身との、彼の同胞との、日常的諸関係を遂に統治するにいたった。公会的、私的生活の総体を、量的なものが支配している。

「私は人間とは何かを知らない、私はその価格しか知らない」と、『例外と規則』の商人は白状している。個人たちが権力を認め存在せしめる範囲で、権力もまた、その限度に合わせて個人たちに枠をはめ、彼らを基準に従わせる。権威主義的な制度にとって、個人とは何か。

その分野の中にきちんと位置している一点である。しかもそれは、座標として記入され、整理された諸要素が、それぞれの点にその正確な位置を指定している図表上に、数学を介して権力が認めている、一点である。

生産すること、生産させること、消費すること、消費させることについての数量化された能力は、哲学者たち

享楽とその冒險的な探究との間の情熱的緊張によって生命を保っていたものが、オルガスムに似たものにすぎないながらそこまで高めることを無益にも人々が期待している、そのリズムで、機械的に再生産される動作の細々とした連続の中で、遂に風化してしまった。速度の、急速な変化の、時計に背く愛好の、量的なエロスは、いたるところで快楽の正統な顔をゆがめている。

質的なものが、終りのない連続、その一時的な終りは、つねに快楽の否定であり、ドン・ファン主義におけるように根本的な不満足である連続、量的なものの無限の外観を、辛うじて覆っている。更にもし現行社会が、この種の不満足をそのかしていたなら、それがもし、飽くことを知らぬ渇きに、その荒唐とその気違いじみた魅力とをほしいままにさせる絶対的な許可を与えていたのなら！ 僅かばかり覚めている、しかし心地よい受動性——美しい娘たちや才人たちのいる宮殿、精製された麻薬、凝った料理、頭に来る酒、甘美な香料——をもたらず一切のものの閑暇を楽しんでいるのらくらものの中に、生活を一新しようとするよりも、生活が提供するものと愛想のよいものの中に避難所を求めようとする男に、大がかりな享楽者に（豚は楽しみ方しか知らない）、何らかの魅力を認めることを誰が拒絶するだろう？ え、何だって？ 今日ではそんな選択をする人は誰もいないというのか。量的なものは、東の社会でも西の社会でも

にとつてあれほど親しい（殊に彼らの使命をあれほど啓示する）あの表現、人間の尺度、という表現を見事に具現化している。走行距離、走行速度、ガソリン消費を一括して評価されることは、自動車の遠乗りのささやかな快楽にも及ばない。経済的な強制が、感情を、情熱を、欲求を、それらの質造物をしぶしぶと与えつつ横領してゆく速さの下では、人間にとつてはほどなく、人間だった思い出しかもはや残らぬこととなる。人がそこで回顧的に生きることとなる歴史は、生きながらえることの慰めとなる。計量しうる、計量される時間・空間の中で、真の喜びがどうして維持されよう。そこには無邪気な微笑すらない。せいせい、持金に對する、持金に應じて存在する、野卑な満足があるだけである。計量しうるものとしての物は物しかない。それ故に一切の交換が繰返しう

●人間にとってほどなく、人間だった思い出しに残らぬこととなる

分配されている。財界の大立物は、生きるために一ヶ月しか残されていないとしても、彼の全財産を途方もない饗宴の中で使い果すことを、まだ拒絶するだろう。利潤と交換の道徳は、その餌食を見のがしはしない。家族のための資本主義経済は、慎ましき、と呼ばれている。

しかしながら私は、可能なものの多様性に、数多の次元を持つ世界を創立するという魅惑的な幻想を残しておく、といったのだが、量的なものを質的なものの表皮に閉じ込めるとは、瞞着のための何という横領だろう。

交換を贈与(2)の中に含めること、天と地との間ですべての冒険(ジル・ド・レーのそれ、ダンテのそれ)を花咲かせること、それはまさしく、ブルジョア階級に禁止されていたことであり、それは、ブルジョア階級が商業と産業の名において根絶したものである。そして彼らは、そんな風にしていかなる郷愁をも自らに禁じた。哀れな、そして貴重な——同時に無である——触媒、そのおかげで、階級のない、権威主義的な権力のない社会は、その貴族的な子供の頃の夢を実現するだろう。

封建的・部族的な統一的社会は、信条の中に、最も重要な、神話的な、神秘化された、質的な要素を維持していた。ブルジョアジーは、権力と神との統一を打ち砕くや否や、統一的な精神を、もはや彼らの手中から抜け落ちたものを、権力の小片や屑で包み込もうと努力した。悲しいかな、統一がなければ質的なものはない！ 民主主義は、社会の微粒子化を伴って勝利した。民主主義は、最大多数の限定された権力であり、限定された最大多数

●時計に背く愛好の、量
的なエロスは快楽の正
統な顔をゆがめている

の権力である。早くから、いくつもの大イデオロギーは、数への信仰をうっかり洩らしている。祖国とは何か。今日では、数千の旧戦士である。では、マルクスとエンゲルスが「わが党派」と呼んだものは？ 今日では幾百万の選挙の票であり、数千の色刷りのビラであり、一つの大衆の党である。

事実、イデオロギーは、量からその本質を引きだしている。それは、時間（バグロフ風の調整）の中での、空間（消費者による引受け）の中での、幾千幾万回も繰返して再生される思想以外の何ものでもない。イデオロギー、情報、文化は、純粹に量的なものとなるために、その内容を次第に失いつつある。情報が重要でなくなればなくなるだけ、それはますます繰返され、それは人々を彼らの真の問題からますます引き離す。しかもわれわれの前にあるのは、それこそが他のいかなるものにもまして通用する、とゲッベルスがいった、大きな嘘どころではない。イデオロギー的な安売りは、それが相次いでその異論の余地のない優越性を認めさせる、百の政治的な概念、百の駄本、百の漂白剤を、同じ確信の力で陳列している。イデオロギーの中でさえ、量は量によって自滅する。調整は、やたらと矛盾し合って衰弱する。そこで人は、山をも隆起させる質的なものの美徳を、いかにして再発見するのだろうか？

反対に、矛盾し合う調整は、心理的衝撃に、心的抑制に、痴呆化の根本的な拒否に到達する危険を冒している。確かに、かわすこともありうる。すなわち、調整さ

れるものに、二つの嘘のどちらが最も真実なのか判断させること、偽りの質問を提起すること、偽りのジレンマを生じさせること、である。問題は、そうした空しい転嫁が、消費社会がそのメンバーに強いている害毒を、あまり目立たないものにするものである。

倦怠から、各瞬間に、画一性へのあらがいがたい拒否が生まれる。ワッツやストックホルムやアムステルダム（諸事件3）は、いかに些細な口実から望ましい紛争が噴出したかを示した。繰返されるどれほどの量の嘘が、革命的な詩のただ一つの行為を無にしうるか。ヴィラからルンペンへ、ストックホルムからワッツへ、質的な騒乱、大衆を急進化させる騒乱がある。というのもそれは、大衆の急進主義からでたものであり、服従の、衆愚の限界を改めるからである。

II

統一的な制度の下では、聖なるものが社会的ピラミッドを固めていた。そこでは、領主から農奴にいたるまで、各個的存在は、摂理の祈願や世界の秩序や王の恣意にしたがって、その地位を守っていた。若いブルジョアジーの制度破壊的な批判によって崩壊した、その機構の一体性は、周知のように、聖なる階級性の影を薄くすることなく、消滅した。ピラミッドの解体は、非人間的なものを抹殺するどころか、それを細分化した。われわれは、社会的微粒子化によって処理されるものとなった小さな個的存在、小公市民たちが絶対化されたのを見

●ストックホルムからワッツへ、質的な騒乱がある

●イデオロギーの中でさえ量は量によって自滅する

る。自己中心主義のふくれた想像力は、一点において維持されるもの、他の幾千幾百もの点と全く相似のもの、自分らの巧妙な迷宮を転覆されたばかりの同じだけの蟻と同様に、そこそこで多忙な、自由な、平等な、友愛的な砂粒を、宇宙として示した。それは、神が集中点を供給するのを止めて以来乱れた線、明白な混乱の中からみ合い切れ切れになっていく線、でしかない。というのも、誰一人として思い違いをしないからである。すなわち、競争的なアナキー、個人主義的な孤立にもかかわらず、階級と特権階級の利益が結合しており、聖なる幾何学に対抗する、しかも、自己の一体性を回復するのにまことにやきもきしている、幾何学を構築するからである。

さて、統一的権力の一体性は、聖なる原理の上に築かれたにもかかわらず、眼に見える、各自によって親しく体験された、一体性である。細分化された権力の物質的な原理は、逆説的に、抽象的な一体性をしか許容しな

い。経済的な生きながらえの組織化が、いたるところに現存する、（パンを切る、くさめをする……といった）最も取るに足らない行為の中にいたるまでいたるところで証人をうる、内在的なあの神に、どうして円滑に代れるのだろうか？ 人間たちの非聖化された政府が、サイバネテックス技術者たちの援助をえて、封建的支配様式の（もとより完全に相対的な）全能に匹敵しようと仮定しよう。誰が——そしていかに——社会的に連帯的な共同体の生活を包み込んでいた、神話的な詩的な環境の埋め合せをし、それにいわば第三の次元を保証するのか？ ブルジョアジーは、彼らの半革命の翼にまんまとひっかかったのである。

☆

量的なものとは線状のものは混同される。質的なものは多価値であり、量的なものは単価値である。細分化された生活、それは生活の線である。

●量的なものとは線状のものと混同される

D. クーパー著 反精神医学

Psychiatry and
Anti-Psychiatry

本書は、精神医学に対する弾劾書である。と同時に人間学の書物でもある。クーパーはレインやエスターソンとともに、狂気を現象学的小説および実存的に把握して論理を展開している。

主要目次

第1章 暴力と精神医学 第2章 家族と精神分裂病 第3章 ある家族についての研究 第4章 無効化された者とその家族と病棟 第5章 Villa21—反精神医学の実験 第6章 今後の発展に向けて
予2500円

精神医療

精神医療編集委員会編 各 600円

Vol.2 No.1 精神医療の質を問う
Vol.2 No.2 保安処分
Vol.2 No.3 拘禁と治療
Vol.2 No.4 精神衛生法体制下の医療
Vol.3 No.1 精神医療における人体実験問題
Vol.3 No.2 精神科治療とは何か

次号予告

Vol.3 No.3
精神衛生法

岩崎学術出版社

文京区小日向1-4-8
☎ (947) 1631

天空への魂の晴れやかな昇天は、未来の滑稽な踏査と代っている。いかなる瞬間も、旧社会の循環する時間の中にはもはや扱がつかない。時間は、糸である。生誕から死亡まで、過去の記憶から待たれる未来まで、果しない生きながらえが、逃げてゆく時間によっても訪れてくる時間によっても少しづつかじられる種類の瞬間と、現在との連続を引き伸ばす。宇宙の力とともに共生の中で生きるという感情——同時性というあの感覚——は、世界の中のわれわれの経過はわれわれと一致することにひどく気を配っている、という喜びを古代人に告げていた。そうした喜びの何が残っているだろうか？ すぎゆくことのめまい、時と同じ歩調で急いで歩むこと。時間と交流する人々がいるように、時間に加わっていること。

問題は、循環する時間、神秘的な流れである時間を哀惜することではない。そうでは全くなく、それを訂正すること、それを聖なる動物にではなく、人間に集中させることである。人間は、現在の時間の中心ではなく、単に点である。時間は、点——それぞれが、絶対、ただしくどくどと繰返される絶対のように、他の点とは無関係におかれた点の、連続からなっている。なぜならそれらは、単一の線上に位置するからであり、すべての行為、すべての瞬間は、平等な重要性を帯びている。それこそまさに凡俗なものである。量的なものの支配は、同様な他に似たものの支配である。絶対化された細片は、おきかえられうるものではないか？ それぞれが他から解離

されている——それ故に人間それ自身から切り離されている——生きながらえの各瞬間は、それらに呼応する特殊化された態度である、役(4)が次々とつづき、互いに似ているように、次々とつづき、互いに似ている。オートバイに乗るように、人は愛の営みをする。各瞬間にはその常套的な形式がある。時間の断片は、人間の断片を矯正しえない過去へと押し流す。

思い出の首飾りの希望の中で、ビーズに糸を通していつまでも(つづきぬこと)何になろう！ 更にもし、ありあまるビーズが首飾りを台なしにするなら、尚更のことである。一瞬から一瞬へ、時はその井戸を掘る、すべては消えてゆき、何一つ創造されない……。

私は一連の瞬間を望まない。そうではなく、偉大な一瞬を望む。体験された、そして持続を知らない全体を。私がそこで持続している時間は、私の老化の時間でしかない。しかしながら、そんな時間の中にも、潜在的な時間、可能なものが必然的に根を張っている。各瞬間を連合させること、それらから喜びを取り出すこと、それらから生の約束を解き放つこと、それはすでに《状況》を作り出す(5)ことを学ぶことである。

☆

個人的な生きながらえの線は、交叉し、ぶつかり合い、切れ切れになっっている。それぞれが、他人の自由をその限界としている。企図は、それぞれの自律の名の下に撤回される。そんな風に、細分化された権力の幾何学

●私は一連の瞬間を望まない。そうではなく、偉大な一瞬を望む。……持続を知らない全体を。

は作られている。

人は世界の中で生きていると思っっている。そして事実、人は展望の中に並んでいる。もはや原始的絵画の並列的な遠近法ではなく、ルネッサンスの合理主義者たちのそれである。視線、思想、行為は、それらを整理し、それらを矯正する、逃走する遠くの点の魅惑から辛うじてまぬがれている。それらは、その点のスペクタクル(6)の中に位置している。権力は、最も偉大な都市計画家である。それは、生きながらえを、私的な、また公的な細片に分ける。それは、開墾された土地を低額で

買い足し、その規制にしたがうことなしに建設することを禁ずる。権力自身、各自からその皮を剥ぎとるために建設する。権力は、町々を築きあげた親方どもが羨しがる、重々しさをもつて建設し、聖なる階級制の古地図を、指導者たちの地域に、中堅層の地区に、労働者たちのブロックに、改める。

(訳) えぐち かん

●生活を建て直すこと、世界を再建すること、それは同じ意志である

訳註

(1) ヴァネーゲームの著『若い世代のために』の第十章の全訳。

(2) 別稿の、私の「創造性・自発性・詩」の末尾近く(一四五頁)を参照のこと。

(3) 一九五六年十二月、一千の若者たちがストックホルムの街々で荒れ狂い、自動車焼き、ネオンを破壊し、デパートを略奪した。一九六五年夏、アメリカのワッツでは激しい暴動が起きた。一九六六年、アムステルダムでは、労働者たちが何回にもわたって街頭を占拠した。

(4) 情況主義者は、現代社会を、スペクタクルのように、舞台と観客とに完全に分離された世界、大多数のものは、与えられ、動かされ、操られている世界と見なし、それをスペクタクルの社会と呼ぶ。そこで人は、単に「役を演じさせられている」にすぎない。役、スペクタクル、ともに情況主義者特有の用語。

(5) 情況主義者は、情況主義的とは「説明すべき意味その他として状況を認識するためではなく、情況を作りだそうとする行動」だ、と定義し、「人間は彼がよぎる情況の産物なのであり、人間的な情況を創出することが大切な」だ、と主張している。『現代アナキズム研究』4号四二—四六頁参照のこと。

(6) 注(4)を見よ。

La règle du quantitatif par Raoul Vaneigem in *Traité de savoir-vivre à l'usage des jeunes générations*
© Gallimard

創造性・自発性・詩

江口幹

ヴァネーゲームのこと

ギイ・ドゥポールと並んで情況主義者（この主要な論客であるラウル・ヴァネーゲームについて、おそらく私はまだ書くべきではない。少くとも、書くことは早すぎるし、何かいうとすれば無責任になるろう、と感じている。というのも私は、ヴァネーゲームの著者、約三百頁の『若い世代のために』を十分に読み終えていないし、この小文を書くまでに、一応は眼を通しておきたいと考えていたものの、生憎私はいま病臥中の身であって、速読する体力がなく、また速読できる性質の書物でもないで、辛うじて拾い読みをしたにすぎないし、しかもヴァネーゲームは、一読すればただちに理解できるという性質の著者ではなく、彼が読者の内部に触発したものは、ゆつくりとはぐくまれているうちに次第に形を露わにする、

という書き手なのであり、それやこれやも考えると私は、もつと時期を待つべきではないか、待つことが妥当なのではないか、と感ずる。

しかし、それにもかかわらず、私にはヴァネーゲームについてどうしても語りたい、という願いもまた強い。私の彼についての知識は一知半解の域をでていないといっているが、それでもすでに、彼が容易ならぬ問題を提起している思想家だ、という思いはひしひしと迫ってくる、それに彼は、日本では全く未紹介の思想家であり、私の知る範囲では、日本人の筆で彼について語られたことはまだ一度もないのである。

私がフランスの友人たちから、ヴァネーゲームの書物についての讃辞、というよりむしろ絶賛を聞いたのは七一年だっ

た。以来私は、何かの機会にフランスの友人たちに会うたびに、誰もが惜まず彼への讃嘆の念を表明するのを繰返し聞いた。なかなか注目すべき男らしいな、というのがヴァネーゲームという名に対して私が長らく抱いていた印象だった。ただ、残念なことには、その印象は容易に発展しなかった。というのも、彼の著書『若い世代のために』は、私の部屋の書棚に放置されたまま埃をかぶり、ひもとかれることがなかったからである。重大な書物らしいとは感じていたので、いずれ時間を作って熟読したいという希望は持っていたが、多忙にまぎれてその時を得られずにいたのだ。ところが、ごく最近になって読み始めてみて一驚した。ほとんど惑乱するほどに興奮した。それは、恐るべき未知の宝石が散りばめ

●ヴァネーゲームの著者『若い世代のために』

られていて、という直覚にもとづいたならぬ興奮である。

ヴァネーゲームを読めば、私を即座に引込んでゆくのは、彼の書物のどの部分であらうと、どんな瑣末な文章であらうと、そのどこにも、そのどの一行にも、彼がいる、という手ぐたえである。そこに私は、確実に自分の世界を持った思想家の存在、現実を革新すべきものとして直視している人間の意志、を感ずる。そんな風に私をとらえるのは、透徹した感覚であり、感情よりは意志を表明している文体、簡潔な、練り抜かれた、硬質の文体、痛切な響きを与えられた文体である。それは、理解させるよりも先に、その内包するものがまず心情を描する文章である。決して平易とはいえない。むしろ、いたずらに平易であることを拒否している。詩的な凝縮を含み、そうであることによって読者に創造的な姿勢を強要している。それは、一行一行熟考を強いる文章であり、より精密によりの確に見直すことを強いる文章であり、そうすることによって新しい視界を読者に開かせる文章である。どの一行も思考を刺戟し、そこに立ちどまらせ、容易に先に進ませない。そのことが私を興奮させる、あるいは楽しませる。

しかし、独自の世界を築きえた、優れた思想家たちに一樣に見られる特徴を、ヴァネーゲームもまた持っているという、単にそれだけの事実が、私を彼へと牽引するのではない。私は彼の、現代世界に向ける冷やかな皮肉な眼に、私の現代世界への反撥、現代世界を超えようとする意志と同一の志向を感ずる。しかも、私自身が試みた以上に徹底した形で、その志向を深めた人間を感ずる。そのことが、私のまだ知らない、夥しい貴重な示唆を散りばめたものとして彼の書物を映じさせ、私を惑乱させるのである。

昨年私は、初めての長編小説（2）を発表した。その主人公に私は、私たちは「大きな時代の移り目、数世紀にわたって時代を支えていた原理が崩れて新しい原理が生まれてゆく、そうした大きな時代の移り目、そうでないとしたら世界の終末期に在るのではないか」と、いわせている。ややお節介な、作者の注釈めいた言葉を許していただけるなら、その間の中に、私の小説の、主要なモチーフの一つがあったことは確かだった。私は小説を書くことを通じて、これまで時代を支えていた原理が何であったのか、新しい原理はどういうものでありうるのか、それを明らかにしてみたかったのである。

ある。その結果は、不器用な探索を試みた、ということと終ったのだけれども、私がそんな試みをどうしてもせずにはいられなかったのは、生産力の増大、技術の進歩、組織の整備、という方向に理想を見る（旧左翼の志向を含む）現代世界のあり方は、やはり否定すべきものだと思われる。なぜかといえば、私の主人公の言葉をかりながら、私は、「現代は、人間の努力を精神的にも肉体的にも省略することが人間にとって望ましい、という原理に貫かれている。つまり、楽をすること、積極的に何かをするのではなく受動的に安楽を享受することが最も幸福なことだ、という原理に立っている。しかし、それが果して本当に幸福なことなのか。それはむしろ、生の豊かな可能性を閉じ、生を皮相

●理解させるより先にその内包するものがまず心情を描する

●公豊かな社会が実は
いかに貧しいかを見て
いる

を何かに賭けない度合いに比例して、われわれは自己の生を空虚にしてゆく」のだった。その空しい現代人の生、それをヴァネーゲームは、ただ生きながらえていだけだ、と吐き棄てるようにいう。彼は、オルテガとともに、「あり余るほどの豊かな世界にうまれた生が、まさに欠乏との戦いそのものであるような生よりも、いつそう生であり優れている」とは考えない。彼は、「生活水準の向上、無数の便利さ、多種多様な安楽らし、皆のための文化、夢のような安楽」を嘲笑する。「生きながらえるために働くこと、消費しつつ、消費するために生きながらえること」、この地獄のような悪循環に戦慄する。そして、パリ・コミューンの人々は、諸君に高感度のステレオを買わせようとして死んでいったのだろうか、と問い、ある労働者の口を通じて、「一九三六年以来、俺は賃上げ要求のために闘ってきた。俺の親父は、俺よりも前に、賃上げ要求のために闘っていた。俺は、テレビを、冷蔵庫を、フオルクスワーゲンを持っていた。だが結局、俺はバカものの暮しを少しも止めちゃいない」と、いわせている。

「ヴァネーゲームの眼は、公豊かな社会が実はいかに貧しいかを見ている。人間の本質的な豊饒から、いかに遠いかを見ている。現に際限なく消費が楽しま

れているのは、彼によれば、価値や人間の中に量的な相違をしか見出す、あらゆる質的な区別を廃止してしまったからである。「今日では、富んでいるとは、沢山の貧しい物を所有している、ということ」でしかない。経済は人間のためにあるのではなく、経済のために人間が存在している。「現行の経済は、人間を消費者に変えながらでしか、消費しうる価値の、つまり無価値の、ないし、空しい、虚構の、抽象的な価値の、可能な最大の量と人間とを同一視しながらでしか、救われえない。……人間は、最も貴重な消費財とならなくてはならない」のだった。

そうして、現在の生活を凡庸なものが覆い尽くした。その凡庸さを、ヴァネーゲームは唾棄すべきものとして語る。

「ブルジョア革命は、日常生活から見れば、反革命の道を歩んでいる。……自由と安楽の支配を樹立するという約束は、貴族たちが情熱と冒険とで豊かにすることができた生活を、著しく凡庸なものにしてしまった。人々は以来、憎悪よりは軽視に、愛情よりは愛着に、滑稽よりは愚行に、情熱よりは感情に、欲望よりは羨望に、理性よりは計算に、生きることの味わいよりは熱心に生きながらえることに、生きようとしてきた」。生の高揚はもはや過去に属するものとなり、それは郷愁をもって思いだすもの、

な低い領域にのみ押しこめることではないか。それは、人間に対するこの上ない侮辱であり、この上ない頹廃を人間に強いるものとならないか。浪費される夥しい物質、エネルギー、情報、それによる環境の破壊と人間の荒廃、すべてはこの受動的な安楽を礼讃する原理に起因してはいないか。人間にとって望ましい状態、生きることの欲びは、むしろ積極的に力を尽すことによって得られるのではないか。この、力を尽すことにかえって人間の生きる欲びを見る、人間の努力を精神的にも肉体的にも省略しない、でそこに生きる意味を見る、この現代人に染みついていくものとは全く対蹠的な原理、これこそ僕らが立ち帰るべき原理なのではないか」と、考えるからである。この私の思想の中には、人間を、現代世界において期待されるものよりもっと高貴なもの、もっと豊かなものとして期待したい、という渴望があるが、私は、同じ渴きを、現代世界を凝視するヴァネーゲームの眼に、確かに感ずるのだった。

ヴァレリイは、保険というもののほどブルジョア的なものはない、とどこかで書いていた。そうした意味で、現代は全くブルジョア的であり、左翼も含めて、誰もがブルジョアの理想を追い求めていく。できうる限りの安全の確保、できうる限りの危険の回避、である。しかし、オルテガによれば、「われわれがその生

現在の空しい生の「慰め」とするものになつてしまったのだった。

では、そうした現実に対し、ヴァネーゲームはいかなる生を望んでいるのか。哀れな現実の代りに、どんな生を対置しようというのか。創造的な、自発的な生であり、質にもとづく生であり、そうであることによって社会をも変革せしめる生、彼が「詩」と呼ぶものである。

自発性とは、彼によれば、「創造性の存在様式であり」「体験の中心に、各自に自分自身に最も近いものを見出す」す、そういうものであり、「創造的な情熱を具体化する」ものである。質とは、「凝縮されたものの、本質との直接的なコミュニケーション」であり、「創造的自発性を証拠だてる」ものである。

そして、「詩とは、創造的自発性の組織であり、質的なものの、その一体性に固有な法則による、開発であり、「生を変容し、世界を転換させる」ものである。「日常生活の全的な建設」にいたるもの、つまり「革命」に到達するものである。「詩は、新しい現実を生む行為で

ある。それは、急進的な理論の実現であり、特に革命的な行動である」。

ここにわれわれは、フリーエ風のユートピア思想家を見るべきだろうか。それとも、人間の尊厳を希求して止まない、荒野に呼ばわる人を見るべきだろうか。私は、ヴァネーゲームの『若い世代のために』には、夥しい貴重な示唆が散りばめられている、と書いた。ここで、その一例を示しておく。それは、彼独自の史観である。

彼は、現代を中間の時代と見る。現代は、ブルジョアジーの時代であり、「封建領主たちの聖なる階級制と、階級のない未来社会のアナーキーな秩序との間の」、中間の時代なのであり、ブルジョアジーは、来るべき社会を用意する「哀れな、そして貴重な触媒」なのである。

彼は、ブルジョアジーを、「交換の階級」と規定する。「交換と対価物によって人間関係を腐敗」させた階級だとする。ブルジョアジーによる人間関係が交換に立脚しているのに対し、貴族とプロレタリアートの人間関係は、ともに贈与

に立脚している。ただし、貴族の贈与が「威信のための贈与」であり、犠牲を要求することで事実上の交換だったのに対し、プロレタリアートの新しい世代が行うであろう贈与は、愛によって与える喜びにもとづくものであり、そうであることによって「封建的な贈与を超えたもの」になる——と彼はいう。

私には、ヴァネーゲームのこういう議論が実に楽しい。小気味のよい落語を聞いた時のように爽快になる。しかし、その内容が妥当なのかどうか判断を下す段となると、すぐにはできかねる。現実と照合しつつ、長い時間をかけなくてはならない、と思う。

そして、いずれにせよ、ヴァネーゲームの全容と、それについての私自身の評価を語ることは、かなり先の別の作業に属する。ただ、その仕事はたぶん、常套句をかりるなら、公男子にとってまことに欣快なものとなるだろう、と感じている。

(えぐち かん・作家)

●聖なる階級制とアナーキーな秩序との間の中間の時代

(1) 公六八年五月の公およびそれ以後の、フランス左翼急進主義の潮流に大きな思想的影響を与えたグループ。詳しくは、私の「わがドン・キホーテたち」(『文芸展望』4号、もしくは、筑摩書房より五月に刊行される予定の私の『黒いパリ』所収)、または、D. アプター／J. ジョル編、大沢正道他訳『現代のアナキズム』(河出書房新社)中の「フランスの最近の事件にみられる……」を参照のこと。

(2) 『方位を求めて』、筑摩書房。